

現場探 究

日本の城の土台に欠かせない強くて美しい石垣。この石垣造りの名手といわれたのが比叡山麓の穴太(あなた)・坂本地区の石工集団、穴太衆である。穴太衆は明治以降衰退し次々と廃業する。そんな中で伝統を守り、現代に継承するのが栗田建設(大津市)だ。

8月3日。広島県のJR三原駅から北へ徒歩5分、坂を上りきった高台にタケウチ建設(三原市)新本社ビルの建設現場があった。

「三原城跡と調和する景観にしたい」という同社の要望を受け、高さ9.5m幅7.2mの石垣を造るといふ。足元には大中小さまざまなサイズに割られた数多くの香川県産庵治(あじ)石(花こう岩)。炎天下の中、15代目穴太衆頭(かしら)の栗田純徳社長(52)と石工3人が黙々と働いていた。

石垣は東側が高さ約3m、西側が1.5m程度まで積まれている。この日は東の表面を微調整した後、西に積み石を右から順に置いて

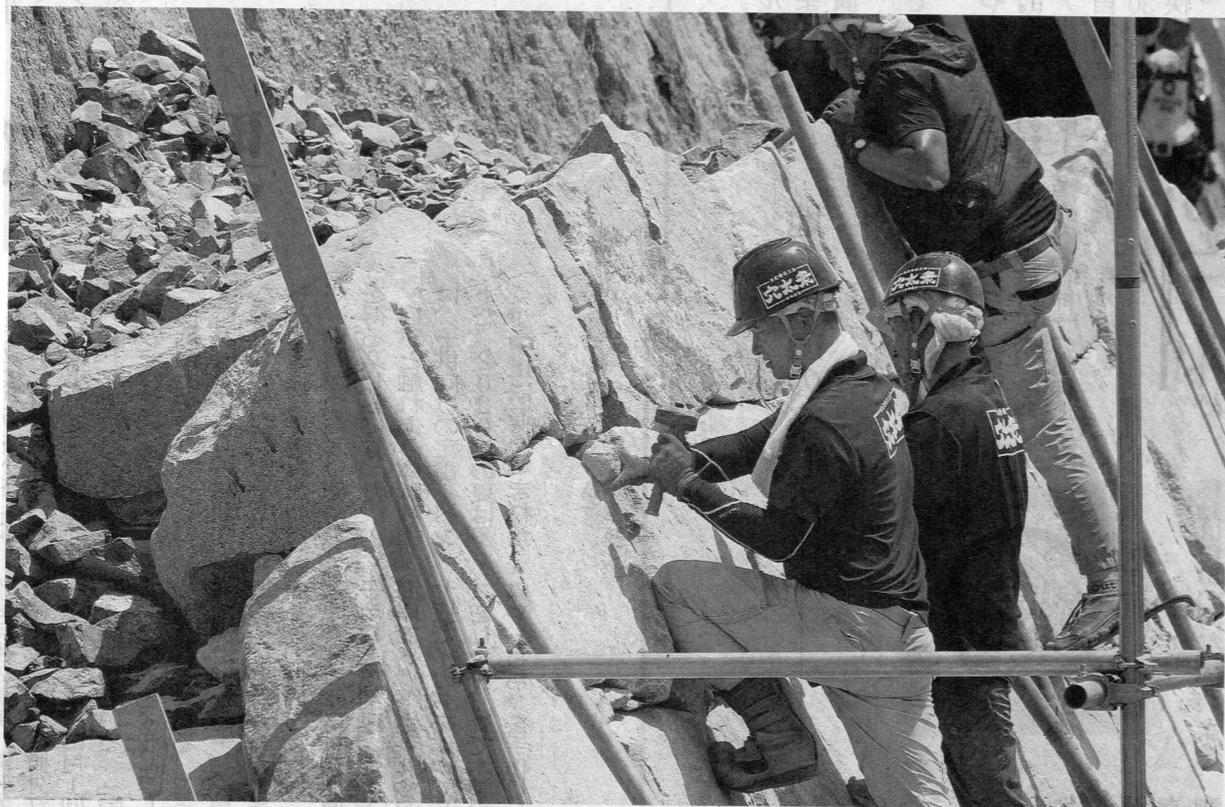
「石の声」聞く 戦国の極意

栗田建設の石垣造り(大津市)

いく作業が行われた。約50四方の積み石がクレーンで運ばれてきた。栗田社長がヒーンと張られた水糸を

見ながら高さや傾斜を確認し「少し奥へ」と指示を出す。石工たちがテコの原理でボールを使い、1歩ほど

押し込んだ。「よし、カインシや。しっかり留める」(栗田社長)。カインシとは鱸介石(ともかいいし)といわ



不規則な隙間に間詰石(まづめいし)を詰めていく—松浦弘昌撮影

れる20歩前後の石で積み石の後方下部から支える。カインシを慎重に差し込むと積み石がピタッと決まった。

次に石工たちは栗石(ぐりいし)と呼ばれる小石を積み石と土砂面の間に丁寧に詰め込んでいく。カインシも栗石も外側からは見えない。「人に見えない所が石垣を支える。いい加減な仕事はできない」と栗田社長。穴太衆を見いだしたのは織田信長だという。1571年、比叡山を焼き打ちにした信長は周辺の石垣を壊そうとするが堅ろうでできない。穴太衆の技を知ると一転、安土城の石垣造りを命じる。その後は豊臣家、徳川家などに庇護され名古屋城、大坂城、江戸城等の築城に参加。名だたる城の石垣造りを担ってきた。

穴太衆の技の極意とは何か。栗田社長に尋ねると「石の声を聞け、ということ」。現場の様々な石を一つ一つよく観察して特徴を頭に入れる。そして「石が行きたい所に行かせる」という。積み石を置く度に、石に話しかけるように腰をかかめる栗田社長。その姿はまるでプロ棋士が、次の一手を思索しているかのようだ。「2手3手先の石を考える。師匠(13代目)の祖父は4手5手先まで考え、それがすべて合っていた」という。実際に次に運ばれてきた石は、パズルのパーツがかみ合うように、隣や下の石と凹凸が合った。

積み石は一つ置くのに1時間近くかかる。正式に置く前に仮置きして石同士の接点を見極め、削りが必要な表面の部分に墨付けして一旦外す。ノミやコヤスケを使って墨付け部分を削り接点を増やす。この作業のため1日に置ける積み石は10個程度。石垣造りとはこれを何百、何千、何万回と繰り返す作業なのだ。

現在の仕事は国内中心だが、数年前に米テキサス州「ダラス・ロレックスタワー」の外構に石垣を築くなど海外需要も開拓している。栗田社長は「伝統の技を世界に広げ、未来につなげたい」と話す。(浜部貴司)



穴太衆のふるさと、大津市坂本地区には街の至る所に石垣がある